任意団体　千年後の未来、村や後世を想って

野田村

大澤 継弥、畑村 茂、廣内 幸作 だらすこ工房

取材日 2013.09.25

小さな木工工房は岩手県野田村の山中にある。東日本大震災後、５人のメンバーで始まった。震災の記憶と復興して行く被災地の姿を伝えるため、村を守りながら倒れた防潮林の黒松を用いて木工品を作っている。また、再生の足がかりとして地域主体の自然エネルギー発電所「野田村だらすこ太陽光発電所」を自分達の手で建設した。

だらすこ工房の始まり

【大澤さん】「だらすこ工房」は私が25～6年前から叔父叔母の家をコツコツと改築して作ってきた場所だ。久慈市内で長年勤め、厄年の前後に病気になり「自分は長生きできないのだろうな」と思った時、先の事を考えた。昔に比べて村には人々が集まる場所がとても少ない。昔は家の縁側に誰かが座っていて、家の前を通る人に「おい、よってけー」と声をかけていた。そうした場所が減り、自分を含めて男性は退職後に時間を持て余してしまうのではないかと心配になった。退職後は地域の人々の集まる遊び場のような工房を作る事が夢となった。

3月11日　14時46分

【大澤さん】だらすこ工房で作業をしている時に地震が来た。とても長く、揺れ方は尋常ではない変な感じだった。地震が来た時、年長者の昔の話をよく聞いていたので、すぐに津波が来ると分かった。家族や町内の身体の不自由な方、お年寄りが心配になり、工房を出発する準備をして町の方へ向かった。ところがすでに津波が来ている事を聞き、町に入る事はできなかった。その晩は家族の消息も分からず、不安な一夜を過ごした。

【畑村さん】薪割りをしていた。「そろそろ3時だからお茶でも飲むかな」と思い、自宅に入ったところで地震が来た。とても長い揺れだったが、家の中では物が落ちる事もなく、ストーブの上に置いてある鍋からお湯が少しこぼれるくらいだった。大きな地震があった時は必ず津波が来る。すぐに高台へ避難した。

【幸作さん】旭町の修理工場にいる時に地震が来た。とても浜に近い場所なので、間違いなく津波が来ると思った。周囲の人に「何も持たずに、とにかく年寄りと孫を車に乗せて逃げろ」と指示をした。揺れているうちに停電になったため、警報は入らなかった。

大澤 継弥さん

【大澤さん】翌朝、避難所を確認し、家族の無事が分かった。自宅は流されてしまった。ショックがないと言えば嘘になる。当然、心の中には悲しい気持ちや悔しい気持ちがあったけれども、表には出さないようにした。

【畑村さん】自宅を津波で流され、妻の実家に1週間ほど避難した。ところが親戚の家にいても何も情報が入らなかったので、久慈工業高等学校の避難所に入った。高校は山の方にあったので、電気は2～3日で回復したようだ。

【大澤さん】津波が起きて、自分の家が海の近くに建っていた事を再認識した。もちろん、海の近くに住んでいる事や津波が来る地域である事を知っていたが、自宅を流される想定で暮らしているわけではなかった。しかし、自然災害は仕方がない。これほど海の近くに家があったのだから、流されるのは当然だろうと思った。家族が無事だった事が幸いだし、俺の将来はもう短いのだから、1日でも多く楽しんだ方がよいのではないかと感じた。

地域の人々の防災意識

【畑村さん】3月11日の2～3日前にも地震があっ

た。私は避難したのだが、近所の人達は逃げていなかった。家に戻ると妻は「恥ずかしい」と言った。周りの人は逃げていないのに、自分達は逃げたからだそうだ。人々にはこうした気持ちがどこかにあるのかもしれない。また、その時の地震で津波が来なかったため、3月11日の地震の後も津波は来ないだろうと判断して逃げなかった人もいたかもしれない。

【幸作さん】それでも津波は黙ってやって来る。いつ来るのか、どのくらいの高さなのか、津波が来るまで分からない。万里の長城と言われた旧田老町の防潮堤でさえ、絶対に安心ではないのだ。どの台風でも町を流してしまうほどの台風はないが、津波は細いところに入るほど威力が増し、波もどんどん高くなる。三陸沿岸は細く狭くなっている場所がたくさんある。だから大きな船も内陸へ運ばれてしまう。津波は何の知らせもなく、静かにやって来る。それを分からずに防潮堤を高くしても意味がない。

【畑村さん】地震が来たら逃げるのは当たり前だ。昭和8年（1933年）の昭和三陸津波の話を聞いていたならばなおさらだと思う。逃げる時は海から1歩でも遠く、1歩でも高いところに逃げなければならない。そうすれば助かる可能性が上がる。逃げるのは恥ずかしい事ではない。

【大澤さん】幸作さんのように豊富な経験を正しく認識している事が重要だ。津波はブルドーザーと同じ原理で、細く狭い場所に入ると威力が増して波は高くなり、波同士がぶつかればさらに波は高くなる。もしかしたら年長者の中には昔の話を聞いて、豊富な経験から自分なりの解釈をしてしまった人もいるかもしれない。犠牲になってしまった方々の状況から原因を把握し、また悲劇を生まないためにも、これからの復興や防災意識に活かしていかなければならないと思う。
2010年に、旭町自主防災組織で防災設備を整備した。旭町内会長を務めており、役場から「津波や水害のある地域なので自主防災組織を整備しないか」と提案された事がきっかけだ。会長に就いたからにはぜひ何かをやってみたいと思っていたし、津波や水害が常襲の地域に住む者として、防災は大切だと日頃から感じていた。（財）自治総合センターのコミュニティ助成事業を活用し、発電機、携帯ラジオ、簡易トイレ、救急箱、災害用車いすなどをそろえた。また、地域の方を対象に聞き取り調査とアンケートを行ない、要介護者や英語が必要な方をリストアップした。支援体制も防災グッズもそろったので、2011年4月からはそれらを使って訓練を行なおうと計画を立てた、

廣内 幸作さん

その矢先の震災だった。津波によってそろえた防災グッズは流されてしまった。
小学生の孫に「おじいちゃん逃げよう、逃げよう」と言われて、しぶしぶ逃げた方は多いらしい。また、津波を見物していて、思わぬ大津波に必死で逃げて間一髪で助かった方が大勢いるそうだ。避難路や避難所の整備は大切だが、個人の防災意識は最も重要なポイントではないだろうか。旭町で自主防災組織を立ち上げた目的の1つは「防災意識の向上」だった。どのような津波が来るのかは分からないのだから、想定内、想定外は関係ないのだ。避難路や避難所が活かされるような防災意識をすべての人が身につけなければならないと思う。

「千年の松」プロジェクト

【大澤さん】皆が仮設住宅に入るようになった頃、周りの様子を見ていると、男の人達が時間を持て余して散らばっている。集会所では女性が集まってお茶っこしていた。「あぁ、やっぱり男の居場所はないのだ」と思った。「遊び場があるから来てよ」とだらすこ工房の事を何人かに声をかけた。そのうちの1人に畑村さんがいた。

【畑村さん】仮設住宅で「輪の会」というグループがあったので、大澤さんから話を聞いて仲間に声をかけた。2012年6月からだらすこ工房へ来ている。最初は「試しに行ってみるか」と軽い気持ちだったが、現在まで通い続けているのだから、だらすこ工房を気に入ったという事だと思う。

【大澤さん】時間制限も拘束もない。誰が何をするのかも決まっていない。工房が少しでも元気の素になれば良いと思っているので、自由に利用してもらいたかった。
だらすこ工房では「千年の松」プロジェクトに取り組んでいる。昭和10年、野田村には約1万本の黒松が防潮林として植えられた。村民の手による3年がかりの一大事業だ。東日本大震災で黒

松は村を守りながら倒れ、現在は数えるほどしか残っていない。復興へ向かう事ができる感謝を忘れず、未来の子ども達をまた来るかもしれない津波から守るために、だらすこ工房では村を守った黒松を活用して、木工品を制作販売し、売り上げの一部を村に寄付をする事にした。それを「千年の松」と命名し、防潮林の苗を買うための資金に充てている。我々の取り組みを子ども達が意識して、感じてくれれば良いと思っている。何のために、どんな思いで取り組んだのか、我々のストーリーが伝わり続ければ、津波に対する意識の向上にもつながると思う。未来の子ども達を守り、夢のある村を残したい。

【幸作さん】教える人は立派な先生でなくともよいと思う。経験した人が教えていかなければ分からない。

【大澤さん】学者などの立場からの見解ももちろん必要だろうが、地元の経験者を大事にした方が良いと思っている。今後の防災意識の向上や防災教育について、しっかりと練り直すべきだ。大震災では多くの映像が残っている。正直、当事者としては見たくはないが、そうした映像を見せる事も、忘れてしまわないため、今後の犠牲者を出さないために必要かと思う。

【畑村さん】この出来事を伝え続けるしかない。それを子ども達にも伝えたい。この大震災を経験した人が自分の子ども達に話せば、その子達は友達に話すかもしれないし、大人になってから自分の子ども達に話すかもしれない。「100年前にね…」「200年前にね…」と、そのように伝えていくしかないと思う。

【大澤さん】だらすこ工房は、取り組んでいる事はてんでんだけれども（めいめい違うけれども）、仲間とお話しできるのが楽しい。何かを作る事が目的ではなく、ここに集まっての情報交換が何より大切な事だ。そして、自分達が何とかめげずにやっている事を、これまで支援をしてくださった方々や若い世代に見せたい。野田村に住む我々の取り組みを発信する事で、野田村の元気を知ってもらう事ができると考えている。

「俺たちが作ったんだ」

【大澤さん】NPO法人環境パートナーシップいわての佐々木明宏さんから、市民共同発電所事業の提案をいただいた。市民ファンドで太陽光発電所を建設し、事業を通して自立と復興を目指そうとする取り組みだ。仲間に相談すると、「やる！」と二つ返事で、とんとん拍子に話は進んでいった。この事業に取り組む事を決めたのは、震災で停電を経験し、福島第一原子力発電所の事故があった事をきっかけにいろいろと考えさせられたからだ。これからのエネルギーには何が良いのか、知らず知らずのうちに情報として入ってきていた。

【畑村さん】現代の社会では電気やガソリンが無いと何もできない。もしも近くにエネルギーの供給源があり、どのような状況でも灯りさえつけば、精神的にとても救われるはずだ。

【大澤さん】2012年11月、雑木林の木を伐採して片づけ、12月に太陽光パネルを載せる単管パイプの基礎を作った。1週間ほど技術指導の方が1人だけ来てくれたが、すべて自分達で建設した。私は配線関係を担当し、仲間には大工や土木関係者のプロフェッショナルがそろっていた。いろいろな人が集まると得意を持ち寄って、何かができる。

【畑村さん】2013年6月、「野田村だらすこ太陽光発電所」が完成した。単管パイプやパイプを地面へ打ち込むための機械はとても重くて大変だったが、建設にかかった約6ヶ月間は本当にあっという間だった。この発電所の建設に取り組んでから、自分が作った電気だと思える。これまで使っていた電気は他の人が作ったものだと実感した。震災を経験したからこそ分かった事であり、よそから入った業者ではなく、自分達でやったのが良かった。自立運転ができるので、非常時に備えて、50 kwくらいの発電所を村にたくさん作れたら良いと思う。

【大澤さん】歳を取っているけれども、我々も将来やエネルギーの事を考えている。大震災を通してエネルギーに対する意識は変わった。市民共同発電所の提案があった時、すぐに挑戦してみようと思った。この発電所は自分達のためではなく、未来の子ども達のために作ったと思っている。村

畑村 茂さん

の人達やいろいろな人を巻き込んで、自分達で作ったのが良かった。エネルギーをより身近に考えられるし、発電所を「俺達が作ったんだ」と子ども達に言う事ができるし、実物を見た時にストーリーが始まる。手づくりの発電所が村のあちこちにあるようなまちづくりをしたい。
新聞やテレビなどのマスコミに取り上げられた事もあり、花巻や仙台、気仙沼から「自分達もやりたいなと思っている」と見学者が来るようになった。現在は2号機の建設も考えている。また、使わなくなったパネルを再利用して、移動式の携帯用発電キットを作ろうとしている。これらの取り組みは夢にも思わなかった展開であるし、このような経験ができてとても勉強になった。仕事として何十年もやってきた事を活かせるのは、「やったな」という達成感がある。ものすごく楽しい。

村への想い、大震災を振り返って

【大澤さん】東日本大震災が発生し、全国、世界中から多くの方が支援に来てくれた。本当にありがたい。支援をしてくださった方々に何とか感謝の気持ちを伝えたいと思い、だらすこ工房の活動を続けてきた。自分1人だけの力ではできないので、仲間や行政に協力してもらう。幸作さんはだらすこ工房にとって、とても頼れる先輩だ。漁師を経験し、昔の事、道具の使い方やロープの結び方など何でも知っている物知り博士である。
次世代の人達はこれからの日本を背負っていかなければならない。高齢者が増え、震災の復興もあり、原発の問題も抱えている。少ない人数でこの日本を支えていかなければならない人達の事を思えば、我々も何かできる事を示したい。動いていれば100人のうち1人でも見ていてくれると思う。村や後世を思う気持ちはきっと世界共通だ。我々のために先祖が防潮林や伝承などを残してくれたように、意識はしていないけれども、村や後世を思うDNAが根づいているのだと思う。
自然災害は誰の責任でもない。自分の家だけが流されれば、「なんで俺の家が…」と思うのだろうが、今回の震災では多くの方が大変な思いをした。形のあるものは流されてしまう。防波堤や防潮林には限度があり、それを超える津波が来たのだから仕方がない。目標としてきた、家を建てる事は達成できた。もう流されて無くなったけれど、自分の人生で家を建てた事実は変わらない。これまで自分の一生はこうありたい、一生のうちにこれをやりたいと思い描きながら生きてきて、震災をきっかけに思わぬ方向転換があったけれども、最終的に考えてみると、だらすこ工房にたくさんの仲間や村民が集まってくれる事が自分の目標の到達点だと思っている。だらすこ工房は村の人達が

野田村だらすこ市民共同発電所

集まる場所として千年続いてほしい。

【幸作さん】津波は明治三陸地震、昭和三陸地震、チリ地震と何度も来ている。その都度皆で頑張って、何とか立ち直ってきた。何回津波が来ても、何とか立ち直ってきた。流れたものは元には戻らない。村も行政も国も悪くない。自然災害が起きた時、誰のせいかと考えても誰も悪くないのだ。なんぼ流れても（何度流されたとしても）元の場所に家を建てたいと思うし、これまで何度も立ち直ってきた野田村を守りたい。
村には昔のような縁側もなくなったし、年寄りが歩いている事は少なくなった。仮設住宅ばかりにいるより、だらすこ工房へ来て、仲間と集まる方がとても楽しい。薪を割ったり、お茶を飲んだりするだけなのだが、また遊びに来たくなる。だらすこ工房は野田村の中で最高の場所だ。

【畑村さん】津波で家を流されてしまったが、流れたら流れたで仕方がないと感じている。今はとてもシンプルな気持ちで、移転先が決まるのを待っている。だらすこ工房へ来て自分が作った木工品の売り上げが村に寄付されるので、工房に来ると「少しは野田村のためになっているかな」という気持ちになれる。行政が頑張っている間は、少しでも野田村のためになるよう取り組みを続けたい。
とても便利な社会になったが、すべてが便利になると、人間は駄目になってしまう。便利な社会になったとしても、昔の知恵や道具は残しつつ、緊急時の備えをしなければならない。そして、津波から逃げる時は、1歩でも海から離れ、1歩でも高い場所に行かなければならない。子ども達、孫達…とずっと命がつながっていけば、その先が未来なのだと思う。津波からてんでんに（めいめいに）逃げて、命さえ助かればまたいつかは会えるかもしれない。それを伝え続けなければならないと思う。自分の子ども達、孫達…と順番に教えて、1世代、1世代、積み重ねていけば、千年後につながっていくだろう。